

商業史の科学性

本 間 幸 作

目 次

- 一、商業史は科学ではないとする説
- 二、商業史は科学であるとする説
- 三、私 見

商業史 (commercial history, Handelsgeschichte) は広義の歴史の一部門である。従って商業史の科学性は歴史一般の科学性に依存する。

現実の社会現象への接近を図る場合、多くの人々は理論、政策、歴史の三つの側面のあることを知っている。これを商業に当てはめていえば商業理論、商業技術論、商業史の三分野のあることを知っている。その他に商業政策論という分野もあるが、政策も技術であると解すると、一応は以上三つの分野に分けて考究されて来たことは事実である。しかも人々は理論科学、従ってまた理論商学のみが純粋科学ではあるまいかという暗黙の了解を持っている。そこに歴史、従ってまた商業史が果して科学であるかが改めて問題とされる必要性が出て来るのである。

尚、ここで注意して置きたいことが一つある。それは歴史科学 (historical science, Geschichtswissenschaft) という

言葉が持つ二義性である。過去と現実とを切り離さず理論科学は歴史的な、発展的方法という発展の道筋を加味したものでなければならぬという意味での歴史科学と、単に歴史は科学であるという意味での歴史科学とこれである。理論経済学は歴史科学であるとせられるのは、前者の意味で用いられているのである。^注つまり、時間系列という縦の普遍性における必然的な複雑性が求められているのである。そうした意味では理論商学も歴史科学であるということにもなるが、ここではそういうことを問題としているのではない。純粹の歴史、従ってまた商業史が、それ自体として科学であるかが専ら問われているに過ぎぬのである。

^注 マルクスは「経済学批判」(Kritik der politischen Oekonomie)の中で「歴史的社会科学」という名称を使っている。

第一節 商業史は科学ではないとする説

商業史は一般化しないから科学ではないとする説はもちろん考えられる。科学という名称をただ一般化的把握の所産に対してのみ用いようとする者はどうしても否定説に傾く。

われわれは歴史、従ってまた商業史は科学ではないとする主張を古くは、特殊的にして個性的なものを科学の概念の中に採用することを欲しなかった古代ギリシアにまで遡らせることが出来る。ヴィンデルバントによれば、かの科学に於ける類概念への拘着は、エレア学徒に端を発してプラトンに伝えられたギリシア思想の偏執である。蓄しプラトン(Platon, 427-347 B. C.)は真実在(das wahre Sein)と同様、真認識(die wahre Erkenntnis)も亦普遍の中に於てのみ見出したのだから。そしてこの偏執はプラントより現代に及び、シュopenハウアー(Arthur Schopenhauer, 1788-1860)がその代弁者となつてゐる。(Windelband, Geschichte und Naturwissenschaft (Strassburger Rektoratsrede) 1894, im Präjudien, Siebente und achte, unveränderte Auflage, Bd. II, Tübingen 1921, S. 154)

^注

注 特殊にして個性的なものを科学の中に採用することを欲しなかった考えをアリストテレスまで遡らせているのはリックカー
トも同様である。(Heinrich Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, Sechste und siebente durchgesehene und ergänzte
Auflage, Tübingen 1926, S. 54)

歴史に関しては古来二つの思潮が対立して来た。一つは楽観主義 (optimism, Optimismus) であり、他の一つは
悲観主義 (pessimism, Pessimismus) である。われわれはそれぞれの代表者をコンドルセとショペンハウワーとに見
出す。

コンドルセ (Condorcet, 1743-1794) は歴史に関し極めて楽観的であって、人類の無限の進歩を確信し、その遺著
「人間精神進歩の史的展望素描」 (Esquisse d'un tableau historique des progrès d'esprit humain, 1795) は歴史
の進歩を十期に分け、その最後を未来の理想社会にあてたのであった。

これに対し、歴史に関し厭世的で、一般に主張される人類の進歩を否定した哲学者ショウペンハウエル (Arthur
Schopenhauer, 1788-1860) は自然科学と歴史との間の普遍的な論理的区別をはっきり認識した最初の一人であったが
しかも彼はこの洞察を唯歴史に対して科学としての性格を否認するために利用したにとどまり、 (Rickert, a. a. O.,
S. 55)、歴史が把握するところのものは常に特殊 (das Besondere) であって普遍 (das Allgemeine) ではないとい
う理由によって歴史に真正の科学たるの価値 (Wert echter Wissenschaft) を拒否したのであった。 (Windelband,
a. a. O., SS. 154-155)^注

注 ショウペンハウエルの厭世哲学はこうである。生の実相は苦である。生の悲惨は永遠に同一であり、唯その表現形式を異に
するのみ。なるほど個物は変化するが、その内容は依然として旧のままにとどまる。そしてこのように解するとき、歴史は
個物を示すのみであって、決して普遍的・概念的な科学たり得ない。(ヴィンデルバント著、篠田英雄訳「歴史と自然科学、
道德の原理に就て、聖」、岩波文庫、昭和六年、第三版、注、一二二頁)

ベルンハイム (Ernst Bernheim) によれば、いわゆる表現主義史観 (die expressionistische Geschichtsanschauung) に属する諸学者も歴史を科学にあらずとする見解に傾く。例えばカイザーリング (W. Keyserling) が「意義、意味は第一次的なものであり、永遠なものであり、真なる現実である。人が事実と称するところのものはその模写ではない。それは幻影が造り出す総てのものと同様頼りにならないものである。……伝説 (Sagen) は総ての歳史よりもっとそう具体的である。蓋しその中には永遠の表徴となつて意味 (Sinn) が表現されているのだから」と称し (Zitiert nach Bernheim, Einleitung in die Geschichtswissenschaft, S. 34; Graf H. Keyserling, Das Reisetagebuch eines Philosophen, 1919.)、レスニング (T. Lessing) が「歴史は意味も関連も持たない偶然な諸事件の集団である。」と考え、「歴史の意味を信じ、それから現在の体験を構成し、それを理想の手に於て一つの自成しかつ変化する現実に形成することは正当な衷心からの要求である。歴史的一元のかような把握の中には感覚的な確信性がある。そしてそれは総ての専門的な科学よりは確実である。」と称し、しかも彼が一般にかような科学の可能性を否認して、人は現実の事実を確定する手段を全く持っていないと主張し (Zitiert nach Bernheim, a. a. O., SS. 35-36; T. Lessing, Geschichte als Sinngestaltung des Sinnlosen, 1919, dritte Auflage 1922) 或いはフリーデル (E. Friedell) が「歴史はすべて伝説である」(E. Friedell, Kulturgeschichte der Neuzeit) と主張し、シュペングラー (O. Spengler) が「既に生成したものは認識されるが、生成は体験せられ、深遠にして言葉でいい現わせぬ理解を以て感得され得るだけである。従つて既に生成した硬直的なものである自然は科学的に取扱われねばならぬが、生成しつつある生活体である歴史に関しては創作することを要する (zitiert nach Bernheim, a. a. O., S. 37) と主張したが如きこれである。

第二節 商業史は科学であるとする説

商業史の科学性を定礎づける立場には二つがある。商的な個別的事件を商業史の対象とする立場がその一つであり、商的な集団事件のみを商業史の対象とする立場が他の一つである。前者は個性記述的な、もしくは個性化的手続きに従う商業史を以て科学たる商業史の要件を満たすと考え、後者は因果認識的な、もしくは発展法則的な商業史のみが科学としての商業史に値すると限定する。前者はヴィンデルバントやリッカードの歴史観に基礎を置くことに於て成立し、後者はヘーゲルの精神史観やマルクスの唯物史観やコントの実証主義もしくはベルンハイムの歴史観に基礎を置くことに於て成立する。われわれの入手し得る現実の商業史を通観すると、記述主義の立場で商業現象の時代別移り変りを記述し、説明するのが大半であって、唯物史観の立場に立つ商業史が僅かにその対極を構成するというのが実情のようである。

一、個性化主義の立場

総ての経験科学は感性界の實在的存在に関して真の判断を下そうとする点に於て、換言すれば、唯現実的に存在する客体のみを叙述することを欲し、想像の産物を叙述することを欲しない点に於て共通性を持つ。その限りに於ては一箇の現実に向けられている一箇の統一的科学が存在するのみである。然し、このことは科学の内容に関するものであって、形式に關係することではない。形式的な方法論の立場からいえば科学論は一般化的と個性化的という概念構成の二つの主要な種類を取扱わねばならぬ。(Rickert. a. a. O., S. 56-57)

こうした立場から科学の主要類型を自然科学 (Naturwissenschaft) と歴史的文化科学 (die historischen Kulturwissenschaft) とに区別し、歴史に科学性を認めたのはリッカードである。

彼は「総ての科学は統一的である。いくつもの真理があり得る筈がない、或いは歴史は一般化しないから、科学ではない」というような一般的な言い回しは論理学にとつては無用である。」(S. 56)と主張し、または「歴史家たちはこの個性的なものそのものを、研究対象が全体として問題たる限り、いつでも科学的に叙述しようと欲する。従つて科学を支配しようとしなくて、理解しようとする論理学にとつては、殆んど総ての近世の論理学、いやそれどころか二、三の歴史家すらもくみしたアリストテレスの意見、即ち特殊的にしてかつ個性的なものを科学の概念の中に採用することを欲しない意見は誤謬でなければならぬことは疑いようがない。」(S. 54)と主張して、「自然法則の設定どころか、一般的概念の構成に向けられていないところの科学があるが、それは言葉の最広義に於ける歴史科学(die historischen Wissenschaften)である。歴史科学はパウルにもペーターにも同様によく合う「既製服」を造ることを欲しないで、換言すれば決して一般的ではなくて、常に個別的であるところの現実をその個性に於て叙述することを欲する。」と断言するのである。(SS, 53-54)

二、普遍化主義の立場

ヴィンデルバントにしても、リッカートにしても更にはマックス・ヴェーバーにしても、社会的関心に係らしめることを以て一つの選択基準にしている点で歴史に社会的要素を持込んであるものの、その内容的素材の重点を構成するものは、個々の事件である。個々の事件は、それは決して孤立しては生起せず、自然や社会という全体との関連の環の中で、他の個別事件と係り合つてのみ成立するにしても、研究指向の重点はそこに向けられず、むしろ切り離された個々の生起事件に焦点を集中して記述するのがその建前となっている。リッカートが社会的興味の観点からヴィンデルバントの個性記述的に(idiographisch)という表現を用いたことに留保をつけて、相対的な意味で個性化的手続き(das idiographische Verfahren)に従つて個々の事件を叙述するのが歴史という科学であると主張することに

ハッキリそれは、現われている (Rickert, a. a. O., Vorwort. VI)。商業史は単なる商的な事件科学であるとする立場はだから、どうしてもその時代、その時代の個々の商業事件の記述に重点を指向せざるを得ない。商業事件は商人個人の商業事件と商業者集団の商業事件に分別され、後者の方が社会性が強いこともろんであるが、個別的事件である点では両者共通である。然しどちらかというところ、事件科学としての商業史の立場からいうと、商業史を特徴づけるものは個人商人の商業事件ということになる。歴史は人間によってつくられ、またそうであればこそ、個人の活動が歴史の中で重要性を持たざるを得ないという主張 (プレハーノフ著、木原正雄訳、「歴史における個人の役割」、三一頁) が通用するというわけである。それは主観主義的な商業史として特徴づけられることも出来る。

主観主義的な商業史の特徴は二つの点に求められる。商業事件の中に偶然性の要素を認めることが第一点であり、個々の商業事件を全体的な時系列的運動法則の具体的な表徴と見ることを拒否することが第二点である。この点では客観主義的な商業史は全く異なる、個々の商業事件の中に必然性の要素を認め、個々の商業事件を全体的な時系列的な発展法則の具体的な表徴と認める点で全く反対の極に立つと解せられるのである。このような商業史観の源流は十八世紀初期のヴィヨ (Vico) にまで遡求される。彼によってそれまでは偶然的な出来事の継起と見られるか、または信仰的に人間にはわからない神の仕業と見られていた歴史の根底に根源的な法則と理性の思想を置く企てが始められたからである。

個々の商業事件ではなくて、その背景をなす普遍的な動きを重視する商業史を以て科学であると解する客観主義的な商業史観は理論上三つに分れる。精神主義的なものと、物質主義的なものと実証主義的なものとこれである。ヘーゲル、マルクス、コムト等の歴史観がこれを代表する。彼等はいずれも商業史を直接の研究対象として、その科学性を論じているのではないが、その基本理念を商業史に当てはめるとそのように解せられるのである。

(1) 精神主義の立場

ドイツ観会論哲学者ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) の「歴史哲学講義」(Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte) は歴史考察の種類を、(Ⅰ)根本的歴史 (die ursprüngliche Geschichte) と(Ⅱ)反省的歴史 (die reflektierte Geschichte) と、(Ⅲ)哲学的歴史 (die philosophische Geschichte) とに区別した上で、哲学的歴史の立場を採用して、理性が世界を支配し、従ってまた世界史に於ても一切は理性的に行われて来たという理性の思想を展開する。(武内健人訳、岩波文庫「歴史哲学」、上、五一、六二―三頁)

ヘーゲルによると、世界史は世界精神の理性的で必然的な行程である(同上訳、六五頁)。世界は物的自然と心的自然との両面を持つ。そして物的自然もまた世界史に係り合いを持つ。けれども世界史の実体をなすものは精神とその発展過程である。だから自然はそれ自身に於て理性の一体系をなしているとは見るべきではなく、ただ精神と関係する範囲内でのみ観察される。ところが精神はわれわれの見る舞台の上では、その最も具体的な現実性であるところの世界史の主役である。(同上訳七四―五頁)

物質の実体が重力であるとすれば、精神の実体、本質は自由である。物質はその実体を自分の外部に持つが、精神は自分自身の許にあるもの (das Bei-sich-selbst-sein) である。そしてこれこそ正に自由である。ところで、このような精神が自分の許にあることは自意識、即ち自分自身についての意識である。世界史とは精神が本来持っているものの知識を精神自身で獲得していく過程である。

植物の萌芽が、その中に樹の全性質、果実の味や形を含んでいると同様、精神の最初の足跡もまた、既に全歴史を潜在的に含んでいる。東洋人はまだ精神が、または人間そのものが本来自由であるということを知らない。彼等は僅

かに唯一者 (Einer)、即ち専政者が自由であることを知るにとどまる。自由の意識はギリシア人の中に始めて現われた。しかし、ギリシア人もローマ人もただ少数者 (Einige) が自由であることを知るにとどまり、人間が人間として自由であることを知らなかった。だから奴隷を持ったのである。ゲルマン諸国民に至って始めてキリスト教のお蔭で、人間が人間として (すべての人 Alle) が自由であり、精神の自由が人間の最も固有の本性をなすものであるという意識に到達した。この意識は最初は宗教の中で、即ち精神の一番奥の領域で起った。この原理を世俗生活にも押し及ぼすことが次の課題となるが、この原理の世俗への適用は長年月を要し、その過程が即ち歴史そのものである。だから世界史とは自由の意識の進歩を意味し、この進歩を必然性において認識するのがわれわれの立場である。

(同上訳七四―九頁)

(2) 唯物主義の立場

経済学的唯物論 (der ökonomische Materialismus) は唯物史観 (materialistische Geschichtsauffassung) とも称せられる社会民主主義の考え方である。マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818-83) によって基礎づけられ、エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-95)、ラファルグ (Paul Lafargue, 1842-1911)、ベーゼン (August Bebel, 1840-1913)、カウツキー (Karl Kautsky, 1854-1938) 等によって発展させられた思想である。ヘーゲルが宗教的、精神的動因に発展の基礎を置く精神弁証法を採用したのとは反対に、人の意識、理念、更には人の共同生活に於ける一切の精神的生括過程、国家・社会に於ける総ての関係、事件の成立や形成を根底から決定する動力は社会的な物質的生産関係にある。物質的な生産関係は単に経済生活を規定するだけでなしに、それに相応した思索、信仰、法、政治、道徳、文化、社会組織の種々の形式を創出し、かつこれらのものがもはや生産関係の変化に対応し得なくなれば、対応し得るように、これらの形式を変革する力となる。もちろん非経済上の諸契機が経済上の諸根本原因によって一度世に出る

と、それは独立のものとなって逆に経済上の諸要素に対して逆作用はするが、然し一切の歴史発展の基礎になるものは経済的な諸契機だけである。社会科学はそうした意味で、総て歴史的なものであり、歴史は社会発展の必然法則を叙述するものとして科学である。ブルジョア歴史(die bürgerliche Geschichte)は多く偉人傑士の事蹟を叙述するが、彼等は経済的条件の奴僕(Diener der ökonomischen Bedingungen)に過ぎぬのであって真の科学の対象を構成しない。真の科学的な歴史は社会的なものに限る、と考えるのである。(vgl. Bernheim, a. a. O., SS. 24-25)

(3) 実証主義の立場

コムト(Auguste Comte, 1798-1857)がその著「実証哲学講義」(cours de philosophie positive, 6 vol. 1837 ff.)において創始した「実証哲学」(positive Philosophie)を基礎とする実証論の史観(die Geschichtsanschauung des Positivismus)は唯物論には近いが、原理上唯物論と異った立場で歴史は科学であると考ええる。コムトによれば、哲学の抽象的思索はなんら現実の認識を齎すものではない。実証的な専門学だけが確実な認識の基礎を与える。それ故人は現実の諸現象そのものを観察し、精密な科学的方法の助けを借りて、それら現象の本質やそれら現象が作用し作用される法則を認識することにみずからを制限しなければならぬ。これが真に科学的または積極的な思维方法であって、それは人間精神の三発展段階の中の最高点として現われる。第一段階は神学的もしくは仮想的な思维方法であり、第二段階は形而上的または抽象的思维方法であり、近代に至って始めて不完全ながら、しかも全領域にわたってではないが、第三段階に到達したのである。思维方法上のこれらの変化は単に認識領域上に現われるのみならず、それとの関連で総ての社会関係に特徴を与え、各時代はその時代の支配的な思维種類に従って総てのその時代相及び総てのその個人に於て一つの連帶的な根本特徴を帯びる。それ故歴史的な文化発展は心理的要素を通じて規定され、「比較

歴史的」方法を媒介として、人はこの発展の法則をいろいろの文化時代の比較的観察を通じて発見するのである。このように考えて、コントは実用的歴史が用いる個人心理的な動機づけを通ずる認識を斥け、心理的な全体また集合の現象、今の呼称でいえば社会心理学を通ずる認識を採用したのである。蓋しそうすることによってのみ人は一般的原因に、発展法則に到達することが出来るのであり、このもののみが科学的価値を持つからである。個人の動機や事件、個人の行為や理念、最大の天才のそれすらも、それらの周囲の全影響、即ち環境（コントが創造した概念である）を通じて規定され、環境は個人的なものによって本質的に規定されず、せいぜいのところ変化されるにとどまる。われわれの時代は形而上的段階から実証的段階への過渡期に差しかかっているのであり、従って到る処で過渡的狀態によって特徴づけられている。たいていの知識部門は既に実証的段階に到達しているが、社会にとって最も重要であり、最も複雑であり、かつ総ての他のものが前提とする知識領域である人間社会の学問即ち社会学（Soziologie）のみはまだその段階に到達していない。しかも歴史はこの社会学に所屬している。（Bernheim, a. a. O., SS. 26-27）

(4) 統計主義の立場

以上のコントの歴史観はその後、広汎な影響を及ぼした。バックル（Henry Thomas Buckle）が一八五七—六一年に著わした「イギリス文明史」（Geschichte der Zivilisation in England, 1857-61）の中に現われた史観も彼なりの偏頗や誇張が見られはするものの、これまた例外ではない。彼は最狭義の合理的啓蒙主義の思惟方法を進歩しつつある文化発展の支配的どころか唯一の因子及び内容とし、かくして感覺的及び道德的な衝動が総ての進歩及び総ての促進的な影響に対し関係のあることを否認する。彼は大量観察を通じてのみ発展の法則を認識しようとする。とはいえコントのように社会心理学を通じてではなくて、統計的観察を通じて、集団行為の統計の上に外見的に現われる合法則性を根拠とするのである。即ち個々の事象や人物の知識はなんらの科学的価値を有するものではなく、一般法則の認

識を通じてのみ歴史は科学の地位 (Rang einer Wissenschaft) に引き上げられるのである。(Bernheim, o. a. O., S. 28)

バツクル以後一層一面的にフランスの社会学者や歴史哲学者によって集団事象の統計や知識が歴史の総体とされて来た。例えばボウルドオ (Bourdeau) の「歴史及び歴史家」(Henri Bourdeau, L'histoire et les historiens. 1888) がそれである。彼は歴史科学の理想は言葉ではなくて、統計的数字と公式とを通じて集団事象を表現することにあるとし、これに反し事実の普通の叙述は文芸の従属的对象 (untergeordneter Gegenstand schöngeistiger Literatur) であると説明する。(Bernheim, a. a. O., S. 28)

(5) ラムプレヒトの立場

最初、根本史料の収集に従事し、その後統計的方法を加味して「中世に於けるドイツの経済生活」(Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelalter, 4 Bde., 1885-86)を大成したラムプレヒトもコントの本質的な根本思想に類し、个性的事件は芸術的記述の領域 (Gebiet künstlerischer Beschreibung) に属し、個人が全体の状態に依存することを通じて初めて歴史が科学となると説く。ラムプレヒト (Karl Lamprecht, 1856-1915) は一八九一年以後の「ドイツ史」(Deutsche Geschichte, 12 Bde., 2 Ergänzungsbände, 1891-1909)の叙述に於て熱心に行き、またいくつかの理論的論文で述べたことは(一)発展の社会心理学的規定、(二)比較法の手段による諸文化時代の演繹、(三)個別の全体状態への依存、(四)そのことを通じて歴史は初めて現実に科学にまで引上げられること、及び(五)単一の個別的事件は非科学的な芸術的な記述の領域 (Gebiet nichtwissenschaftlicher künstlerischer Beschreibung) に属することの指示、ということに他ならなかったからである。しかも珍らしいことには、ラムプレヒトの歴史に関するこうした考え方はコントと一致しながら、しかも彼自身、このことに気付かず、世人もまた同様永い間この一致に気づいていなかったのである。

(Bernheim, a. a. O., S. 29)

(5) ベルンハイムの考え方

以上で見て来たように実証論史観及び唯物史観は個々の事象や重要な人物一人一人の研究は、真の科学的価値を有していない。蓋しこれら個々の事象は全体の影響下にあり、いかなる科学でも要求する普遍的な因果法則(*allgemeine Kausalgesetze*)を通じて説明されるわけにはいかぬからである。こうした因果律の要求を満たすのは典型的にして集団的な事件であり、集団運動及び一般的状態のみであるから、これらを対象とした歴史のみが真の歴史科学であると説明する。

この見解は全政治史と総ての伝記類とをいわば放逐しようとするものであるが、ベルンハイムによれば、これは多くの誤った前提または概念の不明瞭に起因するものであるという。

ベルンハイムにいわせると、因果認識(*kausale Erkenntnis*)が真正の科学の要求であるとするのは全く正しく、歴史もまたそれを要求する。然し因果認識は自然科学に於て支配的であるやり方、即ち個々の事象、個々の現象が規則的に繰返され、常に同様に決定され、かつその決定され得る一般的原因の結果として認識されるという方法に限定されるわけではない。人はこの種の認識方法を法則的、立法的、規範的認識(*gesetzesmäßige, nomothetische, normative Erkenntnis*)と称するが、こうした認識方法で事足りるのは、一つの領域の個々の事件や現象の相違が重要なのではなくて、それらの平均的にして、規則的な存在や態様を規定する法則が重要である場合に限られる。(Bernheim, a. a. O., S. 48)

けれどもこうした観察方法は一つの領域の現象の差別性(*Unterschiede*)、特殊性(*Besondere*)、一回性(*Einmaligkeit*)が研究の興味の対象を構成するところでは充分ではない。その例は発展、即ち現象の連続し、相違

する変化が認識されることを欲する歴史の領域に求められる。なぜにこのことを通じて歴史が自然科学と相違するかは容易に理解される。歴史の対象は人の活動であり、それは人間の心理的本質上の所与の基本的事実として外的原因を通じて規定されるのみならず、本質的には内的原因を通じて、換言すれば、そのために人は目的的に活動するところの意識、即ち知・情・意の内的な反動及び衝動を通じて規定される。この内的原因は心的因果性 (psychische Kausalität) に属し、この種の因果認識は歴史に於て主として当てはまる。というのは外的な物的原因はたいてい人間の意識の中に入り込み、心的動機となるということを通じてのみ作用するにとどまるからである。心的因果性はその根本に於て普遍的な自然必然性に根ざすこと決して物的因果性に劣るものではなく、またその普遍的法則を有する点で劣ることもない。しかもそれは他の方法でその領域の現象を説明する。即ちそれはいつも同様に決定され、その決定され得るその原因の結果として (進行的に *progressiv*) 説明するのではなくて、個々の場合の特別の事情の下で現われ、その場合にその原因が決定される結果として (退行的に *regressiv*) 説明されるのである。相違が興味の対象たる限り、個々の事件がそれから推論せられ得るためには、人の本性が普遍的に同一であることだけでは充分ではない。それは解釈の本質的な補助手段として役立つところの類推 (*Analogieschlüsse*) を許すのみである。しかもこのことは個人の個別生活上の現象に対しても、集団の全体生活上の現象に対しても通用する。そして後者すらもバックル (*Buckle*) その他が思い違っているように、普遍法則から、何んらか統計的に推論され、計算され、予め決定され得るものではない。それ故集団現象を取扱う限りに於ても、普遍的法則を発見し、それから、個別現象の実際の相違を無視する認識を得ることは歴史科学の任務ではない。歴史科学の領域が問題とする人間の諸活動がわれわれの興味の対象となるのはその差別性 (*Verschiedenheit*)、その発展の特性に於てであって、それ故、もしも歴史を科学に引上げようと考えて、その内容の本質を無視し、恰も自然科学的観察方法がこれを把握することの出来ぬという無

能性が長所であり、そのため、歴史認識の内容を自然科学の方法に従って取扱われるものに限定しようとするならばそれは珍らしい概念の不明瞭であるというべきである。集団状態や集団運動を取扱うからとて「本来の歴史科学」(eine eigentliche Geschichtswissenschaft)が与えられるわけでもないし、個人や個々の事件について物語ればとて、非科学的な歴史(eine nicht wissenschaftliche Geschichte)が与えられるわけでもない。人間の両方の活動が、不可分離の、かつ同等の認識の対象であるところの統一的な科学があるのみである。(SS. 49-51)

以上のベルンハイムの見解を要約するところである。

ヴィンデルバントが自然科学を法則定立的(nomothetisch)、歴史を個性記述的(idiographisch)として特徴づけたのに対して、リッカートが相対的区別でしかないのだと強張しながらも一般化的方法(generalisierende Methode)と個性化的方法(individualisierende Methode)の対立を以て自然科学と歴史とを特徴づけながら、こうした特徴を持つ歴史をも科学の中に編入していることは既述した。(Heinrich Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, Sechste und Siebente durchgesehene und ergänzte Auflage, Tübingen 1926, Vorwort zur sechsten und siebenten Auflage, VII)

これを逆にいえばリッカートは科学は必ずしも因果法則に従うことを要件としないとしているように見える。ところがベルンハイムの考え方は相当異なる。彼に従えば真正の科学は必ず因果認識を要件とし、従ってまた歴史も科学であるものならば、歴史もまた因果認識を要求する。因果性(Kausalität)には外的因果性(äussere Kausalität)、即ち物的因果性(pshysische Kausalität)と内的因果性(innere Kausalität)即ち心的因果性(psychische Kausalität)との区別があり、前者は進行的に、後者は退行的に説明せられるという相違はあるにしても、普遍的な自然必然性の点でも普遍的法則性を有する点でも後者は決して前者に劣るものではない。而して歴史は物質的な因果性の他に、更に重要

な以上述べた性質を持つところの心的、内的因果性に則して叙述せられるものであるから、真正の科学たる価値を失うものではない。これが歴史が科学であるかということに関するベルンハイムの考えの要点である。

要するにベルンハイムは歴史は或る一定の事実領域を因果の連関関係に於て認識しなければならぬから科学であると称するのである。従って彼の歴史科学の定義は「共同体としての人間の諸活動上に於ける人間の空間的・時間的発展の事実を心理的・物質的な、その時々のもとの共同体の価値に関係づけられた因果関係に於て研究しかつ説明するところの科学である」といふことになる。(Die Geschichtswissenschaft ist die Wissenschaft, welche die Tatsachen der räumlich-zeitlichen Entwicklung der Menschen in ihren Betätigungen als Gemeinschaftswesen im psycho = physischen, auf jeweilige Gemeinschaftswerte bezogenen Kausalzusammenhang erforscht und darstellt.) (Bernheim, a. a. O., SS. 46-47)

だから歴史的知識の発展は、本質的に総ての知識の発展に於ける段階移行に対応して、物語りし、或いは数え上げる段階(die erzählende oder aufzählende Stufe)と、教訓的または実用的段階(die lehrhafte oder pragmatische Stufe)と、発展的または発生的段階(die entwickelnde oder genetische Stufe)という三段階を経過し、それぞれの段階に応じて(一)物語風の歴史(erzählende Geschichte)、(二)教訓的(実用的)歴史(lehrhafte (pragmatische) Geschichte)、(三)発展的(発生的)歴史(Entwickelnde (genetische) Geschichte)という三種の歴史の区別を生成させるのであるが、真正の意味の科学としての歴史は、これら三種のうちの最後の発展的歴史のみだという結論になる。(Bernheim, a. a. O., SS. 6-11)

およそ知識部門は文化の進行に従って変化し、科学が古ければ古いほど変化が著るしいのが常である。だから知識が科学にまで発展するその発展の道筋を跡づけていくと、あまねく知識は、(一)対象の多少とも不秩序な数え上げ、ま

たは並置 (Aufzählung od. Zusammenstellung der Gegenstände) の段階から漸次一般的目標に従う組織的秩序づけ (systematische Ordnung) に向上し、次で (二) 顕著な外的目標から内的な連関、構造、特性へ前進することによって、その知識は深まり、拡大され、(三) 遂には因果連関の知識の基礎の上に全領域を有機的全体として把握する、つまりそこに至って始めて真正の科学となる、という順序を辿る。換言すれば知識は (一) 不秩序な並列的なものから、(二) 組織的・秩序的なものへ、(三) 更には内的な連関に眼を向けた因果的把握にと進化するものであって、この最後の段階が即ち、科学成立の段階である。歴史という知識の発展もこの漸次的な進化発展の過程の枠内にあり、かくして歴史は三種の歴史のうちの発展的、発生的歴史に至って始めて科学の列に上昇することになった、とベルンハイムは考えるのである。(Bernheim, S. 6)

だから、ベルンハイムにとって発展ということが科学としての歴史の成立要件の上で如何に大切な要件であるかが判る。彼は、ティセン (Johann Thysen) が空間的限定を排して単に時間的な系列配置に於て歴史の素材を把握しようと試みた (Die Sinnlichkeit der Geschichte, 1924) することに反対し、空間的・時間的発展の事実 (Tatsachen der räumlich = zeitlichen Entwicklung) として歴史の素材を把握しようとするのである。(S. 53)

然らばベルンハイムがかくも重視する発展 (Entwicklung) とは何か。

ベルンハイムにいわせると発展とは事実在即して証明され得る作用連関 (tatsächlich nachweisbare Wirkens-zusammenhänge) の義である (S. 53) として作用連関という中立的意義で発展という言葉を使っているのである。これを具体的にいうと、それぞれの歴史現象が、その時代にあるところのものにどのようにしてなったのであるか、また更にそれはどのように作用したかということを知ろうと思う、そのことが発展的に知るといふことに帰着するのである。(S. 11)

もちろん、この歴史でいう発展の中味は広義のものであって、作用、発展に対し対立し、阻止する諸要素をも含んでいる。一時的、部分的に、または一般的に作用するに至らなかった諸要素も含まれている。こうした意味で各々の事実は他の事実と二重の関係、二重の因果的種類の連関におかれている。一面では一般的な原因と条件、他面では全系列の特殊の事実と連関しているのである。そして各々の事実はそれらの内部で存在し、一部分としてそれらに所属するのである。だから、これら両関係とも軽視することは許されぬのである。(S. 53)

この際、必要と思われるだけ、広く昔に遡り、また後世に下って把握する。常にそのようにして、かの事件を相関連する事実のこの特別の全体の一部の片として、この特別の発展系列の作用し、作用される分枝として把握する。他方それは一般的原因と因果的な関係に立ち、かような因果関係を通じて説明されるべきである。従って名誉心、征服欲、宗教的靈感、氣候的、文化的影響を通ずる民俗力の衰退、不撓不屈でしかも原始的な民俗性の優越、その他多くの心的、物的な要素によって説明されることを要する。総ての個々の事実と同様、総ての事実複合体 (Tatsachen-complex) も一般的なものと及び当該発展の特別の全体との関連にあり、人物も事件系列も、国家も民族も、大小の時間節もその点では変りはない。かくて事実はその成立の動機と共にこの関連に於て徹底的に価値に關係する。それを価値づけるのは、その時々考察された事実系列の経過と結果とに対しても興味 (Anreiz)、従ってまたその時々共同体の価値 (Gemeinschaftswerte) に依存するのであって、哲学大綱の「一般的に承認された」永久的な価値によるのではなう。(SS. 53-54)

こうした発展の概念は今日では自明的と思われているが、それは人の精神に決して生得的なものではない。人事を發展の産物として、即ち内外の原因の統一的な作用連関に於て把握するためには高度の全精神文化が必要なのであって、そのためには先ず精神的な前条件が一つ以上構成されていなければならぬのである。(S. 11)

それには先ず、人間本質の統一性に関する観照が存在していることを要する。けだし、相連関して発展すると考えられ得るものは統一的に観照せられるものに限られるからである。(S. 11)

第二の必要な観照はあらゆる人間関係にあつては、継続的变化が生ずるという観照である。これは発生的観察法にとつて一個の先決条件であつて、古代に於ては不充分にしか存在しなかつたものである。(S. 12)

第三に必要な条件は、人間の各種の関係や活動は内面的な因果関係と交互関係の中にあり、従つてまた政治的事件は経済的及び社会的状態に影響を及ぼし、逆に宗教や芸術や科学は相互に、また国家や社会に於けるその他の事情に對し活発な関係にあり、国土の氣候や土地状態は国民の性格や職業に影響を及ぼす等といった洞察であり、それは極めて徐々に歴史發展の第三段階目に至つて始めて構成された(SS. 12-13)

中世の終末以来、人間の歴史の包括的にして深遠な把握に必要な前述の前条件の総ては最も多様な方向から精神文化や科学の一般的進歩と関連してますます満たされた。こうした発生的把握が勃興したのは第十八世紀の後半以来のことであつて、十九世紀以来支配的となった。(S. 13)

第三節 私 の 考 え

歴史、ひいてまた商業史が科学であるか、どうかは科学とは何かという定義と極めて密接に関係する。しかも科学とは何かに関しては記述学派と説明学派とでは格段に異なる。

記述 (description, Beschreibung) とは何かに関しても広義と狭義との二つの區別がある。広義では個々の経験対象の屬性を文章上に模写することを指し、狭義では思惟せられた普遍的な類に共通な屬性であつて、他の類と異なる特徴を構成するものを分析して、これを類概念により資辭として当該類を表わす概念の主辭に結合し、命題をつくる

ことを指す。(参照、田辺元「科学概論」、二二六、二二八頁)

これに対し説明 (explanation, Erklärung) も広狭二義に分れる。広義の一般的意義で説明とは一般的理由を与えて、特殊の事実の存在する所以を理解させることを指し、狭義ではこれらのうちの因果法則的説明のみを指す。一(田辺、前掲、二二四、二二五頁)

a、記述学派

記述学派 (descriptive school, deskriptive Schule) はいわゆる説明科学から因果の概念を排して、「科学は単に記述するのみ」と主張するところに特徴がある。十九世紀後半、前代の自然哲学の独断的、形而上学的自然研究に対し実証論 (positivism, Positivismus) の反動が起った、そのことに関連して生じた学派である。キルヒホッフ (Gustav Robert Kirchhoff, 1824-1887)・マッハ (Ernst Mach, 1838-1916)・オストヴァルト (Friedrich Wilhelm Ostwald, 1853-1932)・ピアソン (Karl Pearson, 1857-1936) 等の物理、化学者がその代表者である。例えばキルヒホッフはその著「力学講義」(Vorlesungen über mathematische Physik I. Mechanik, 1876)の序文で「力とか原因は実際に経験せられたものではないから、力学はこうした概念を離れて、唯経験せられるところの運動を完全にしかも最も簡単に記述することをその本分とする」と述べ、マッハはその著「力学の発達」(Die Mechanik in ihrer Entwicklung, 1883)で「一種の徹底した感覚主義の立場を採り、われわれの総ての認識を感覚に帰着させ、科学とは要するに、われわれの経験する種々雑多な感覚を整理して記述する便利な手段であるに過ぎない、因果は唯一の實在的要素である感覚の函数的依存関係を概括的に表わすために人が思惟経済の目的によって造った思想の産物 (Gedankending) に過ぎないとして、思惟経済説を主張する。更にまたイギリスの優れた優生学者、数理統計学者ピアソンはその著「科学の法則」(Grammar of Science, 1899)の中で次のように主張する。實在するものは感官印象のみである。現実の感官印象の

世界の背後の影のような不可知なものを仮定することは徒勞である。感官印象は精神を刺激して構成物及び概念を作らせ、これらのものは再び結合と一般化とを通じて科学的方法を適用すべき一切の材料を提供する。人間の思惟は感官印象をその究極の本源とする。だから科学の素材は精神の総ての構成物及び概念に相当する。この素材の一部分即ち直接の感官印象と連合した構成物を外部即ち自我の外へ投射したものが物理的事実または現象と呼ばれるものである。（平林初之輔、訳、七七、七九頁） 他の素材即ち蓄積された感官印象から分離及び整序の過程によって得られた素材は心的事実、或いは概念と呼ぶ習慣となっている（七九頁） 科学的方法は諸々の事実の注意深くかつしばしば骨の折れる分類、これらの事実の關係及び連繫の比較、そして最後にごく僅かな言葉で広汎な事実を要約する簡単な命題、即ち公式の訓練された想像の助けによる発見から成立する。かような公式をわれわれは科学的法則と名付ける。科学的意味に於て法則とは諸事実の群の間の關係を要約する簡単な命題または公式のことである（一八三頁）。そしてかような法則を発見する目的は何かというと、それは思惟の經濟である。（七九頁）

要するにカール・ピアスンによれば、一切の科学は記述であって説明ではなく、科学的法則は諸現象の感覺的印象の群の關係を思惟の經濟の目的を以て分類比較して、簡単に記述し、要約するための概念的速記（第二版序文）、または公的命題もしくは公式である。（前掲訳七九頁）

自然界の事実は唯、前後相連続した事実であって、その間に別に原因、結果という刻印が押されているわけではない。これを因果と區別するのは一方が他方を生ずる力があると認めるからであって、ひっきりや人の作用を自然に擬して名付けたものに他ならない。この説明上の仮定を漸次除去すれば単に作用の移動という意味の因果關係だけが残る。（桑本嚴翼、「新編哲学概論」、二三三頁） それはどんなふうにといいことは記述することは出来ても、なぜにということの説明することはできない。従って、それはいわゆる論理の根本原理の一つである理由律の要求を満足し

得るものではないのである。(原純、「自然科学概論」、五四頁)

以上に於てピアスンが取扱っている世界は主として人間の知覚機能と記憶機能とによって条件づけられたいわゆる外部世界、つまり自然界であつて、内部世界、即ち人間界ではない。そしてその点は、その他の記述学派の学者にも当てはまる。それはキルヒホッフがドイツの物理学者であり、マッハがオーストリアの物理学者であり、ピアスンがイギリスの優生学者である等の経歴からも当然察せられるところである。だが科学は説明しない、ただ記述するのみという点に係らしめていえば、それは自然科学に対すると同様、社会科学に対しても、歴史に対しても、商業史に対しても当てはまることである。歴史はヴィンデルバントによれば個性記述的であるところに、リッカートによれば個性化的に記述するところに特徴を持つ。しかも両者のいう歴史的事件というのはその範囲頗る広い。社会的興味の対象たる限り集団事象のみならず、英雄豪傑といった個人の事蹟をも含む。記述学派の立場に立つ限り、歴史従つてまた商業史はこうした事件を個性的に記述する点で当然に科学であるということになる。

次に科学は総て法則科学でなければならぬという立場に係らしめていえば、この場合、われわれは法則に広義及び狭義の二種のあることを注意したい。一般にわれわれが法則 (Law, Gesetz) と称する場合、その特色は普遍必然の關係を表わし、未だ経験しない対象の認識を支配し、これを分類し、またその性質を予期させるという点に求められる。かように未だ経験しない類似を支配する力を有すると考えられるとき記述の命題は法則といわれる。これは最も広義に於ける法則であつて、実は分類、定義と称せられるものに他ならぬ。ポアンカレはこれを粗製の法則 (loi brute) と命名した。それは単なる記述的法則であるにとどまり、別名經驗的法則 (empirical law, empirisches Gesetz) とも称せられる。(田辺元、「科学概論」、二二三—四頁)

記述的法則 (descriptive law, deskriptives Gesetz) に対するものは因果法則 (causal law, Kausalgesetz) である。

これにも二つの種類がある。単なる因果的説明を与えることを以て因果法則と称する場合がその一つである。因果は時間上の継起の必然関係である。それは因たる現象あつて、始めて果たる現象が必ずこれに続いて起ることを意味する。本性上法則として表わされるべき普遍者相互の普遍関係を含蓄する因果関係は他の一つである。狭義の嚴密な意味での因果法則はこれらのうちの後者のみに限られる。(田辺、同上三四頁)

因果關係的に説明することは、單に個性的に記述することとは異つて因果關係的に説明不可能のものを排除するだけに、歴史、従つてまた商業史の内容を狭める。單なる個性記述は人間の知的欲望を満足させる役割を果すにとどまるけれども、因果關係的説明は單なる知的満足を超えて、理由律を満たし、原因現象と結果現象との間に必然關係を認めるだけに知識の体系化へ大きな一步を進める。

然しピアソンのいう單なる作用の移動と異つて因果的説明となると、(一)原因は結果を惹き起す力の契機を含むが、そのことは未証明である、(二)何が原因であるかの客觀的判定が難しい、(三)原因は一つであるとは限らない、(四)因果關係は無数の連鎖關係にあるから、どこまで原因を遡らせるか問題である、等の諸点で科学の要件である普遍安當性の要件を満たすことが難しい。とはいえ、一方の科学の要件である客觀的必然性の要件を満たす努力が行われるだけに單なる記述主義の立場に立つ歴史、従つてまた商業史と比べると科学性が強いわけである。ベルンハイムその他の歴史學者が因果關係的な歴史のみが始めて科学となると称したのもこの点では首肯出来る。

因果的に説明するやり方は、一般の因果法則の適用の枠内にあるという点で形式的には、広義の因果法則の範囲内にとどまることになるけれども、全体としてのそのものを因果法則的に説明することとは異なる。因果關係的説明は個別事件についても、全体現象についても可能であるけれども、全体の歴史、従つてまた商業史を一つのまとまりとして把えて、これを因果關係的に説明するとなると、それはどうしても狭義の固有の意味の因果法則的説明、これを

具体的にいえば、発展法則的説明とならざるを得ない。

法則 (law, Gesetz, loi) とは一般的にいつて事物間の不変的關係のことである。個別的なもろの事物を通じて変らない關係であるから、それは普遍的 (universal, allgemein) なものでなければならぬ。またそれは常に個々の事物を支配しているから、必然的 (necessary, notwendig) なものでなければならぬ。だから普遍妥当性 (universal validity, Allgemeingültigkeit) と、客觀的必然性 (objective necessity, objektive Notwendigkeit) とは法則の成立要件であると共に科学、特に法則科学の成立要件でもある。

この普遍・必然關係が絶対的であるか、相対的であるかに従って、法則は絶対法則 (absolute law, absolutes Gesetz) と相対法則 (relative law, relatives Gesetz) とに区別される。先驗学派は主觀本位の立場から絶対法則を認め、經驗学派は普遍・必然の性質を経験の範囲内のものとする立場から法則は総て相対的であると解する。

法則には更に自然法則 (natural law, Naturgesetz) と社会法則 (social law, Sozialgesetz) とに区別される。この區別は自然界を支配する法則であるか、人間界、即ち社会を支配する法則であるかに基づく。經驗主義の立場からみれば、もちろん相対的な意味に於てであるが、自然法則は絶対性を有し、時・処を超越して不変であり、普遍的に妥当する点に特徴を有し、社会法則は極めて相対的であつて、時代と処を異にするに従つて變化的である点に特徴を持つ。

社会法則の代表的なものは、規範法則もしくは規範 (norm, Norm) と呼ばれるものである。法的・道德的意味に於ける法則がこれである。これは、自然法則が常に自然それ自身のうちに存在する普遍・必然關係であるのに対し一定の価値目的達成のために、人間が常にそれに則することを要する普遍・必然關係である点に特有の性格を持つ。ここで自然法則は存在法則 (being law, Sein-Gesetz) と呼ばれるのに対し、規範法則は當為の法則 (normative law,

Soll-Gesetz) と称せられる。自然法則は発見せられ、当為の法則は創造せられ、命令と義務とを包含する。

然し社会法則は総て必ずしも規範法則であるわけではない。自然に対し社会を特徴づけるものは規範法則であるけれども、社会もまた自然の一部であり、自然の特殊規定としての社会であってみれば社会にも存在法則が存在するのは当然のことである。われわれはその例を収穫逓減の法則 (law of diminishing returns, Gesetz des abnehmenden Ertrages) に見出すことが出来る。収穫逓減の法則を社会法則ではなくて、自然法則だと見る考があるが、私は社会に於ける自然法則と見るのが妥当であると考え。スミス流の自由放任論は経済に於ける自然法則を是認したところに最大の特徴を持つ。

以上で述べた自然法則及び社会法則は、実は自然及び社会をそれ自身一つのまとまった全体として把えてそれを貫徹している自然法則及び社会法則という意味でいつているのではない。自然に於ける個別法則、社会に於ける個別法則を説明したまでのことである。例えば引力の法則は自然法則であるが自然法則にはそれ以外にいくらでもある。社会法則についても同様である。社会法則には需要供給の法則とか、グレンシアムの法則とか、効用逓減の法則とかいくらかもある。

もしそうだとすると、こうした自然法則や社会法則の他に、自然をまとまりを持った一つの全体として把え、社会をまとまりを持った一つの全体として把え、更にはこうした意味の自然及び社会を一体的に把えて、これを貫く大法則が別箇に存在しないかどうかが当然に問題となる。

この場合も、社会も自然であるかどうかによって把え方が異なるが、先ず社会も自然の一部であり、自然の特殊規定にしか過ぎぬという立場から論を進める。生態学的に把えると、人間も野生の動物や植物と同様、動物自然であり生物自然である以上 (人間と自然との統一 *Einheit des Menschen mit der Natur*)、人間相互の交渉に於て成立する社

会も自然の一部であり、自然それ自身であることは間違いない。そうすると、自然・社会を一体的に考えて、この自然・社会を貫く法則があるかどうか改めて問われて然るべきだと考えるのである。フィードラーの「単一科学」(Einheitswissenschaft) または「自然科学と社会科学との統一」(Einheit der Naturwissenschaft und Sozialwissenschaft) の思想はかくして生ずる。(Frank Fiedler "Einheitswissenschaft" oder Einheit der Wissenschaft?, 1971, 岩崎允胤訳、二一八頁以下)

注 E・アルブレヒトも自然と社会の統一から自然科学と社会科学の統一をひき出し、「ヴィンデルバントとリッケルトによって代表される自然と社会との二元論は全く支持しえないものである。世界は物質的統一を形成しているからである。……自然と社会との間の原理的な断絶などは全く論外である。したがって、自然科学と社会科学とのあいだにはなんらの原理的な区別も存在しない」と主張する。(岩崎、前掲訳、二一九—二二〇頁)

この場合、先ずわれわれの脳裏を掠めるのは、如何に自然が変り、世の中が変ろうとも、自然は自然であり、社会は社会であって、無始無終的に一定不変であるということこれである。もちろん、公害その他を原因とする人間終末論、社会終末論が無いわけではないけれども、一応はそうように考えられる。かくてもし全一体としての自然・社会を貫く法則があるとする、その法則に言葉の真の意味に近い絶対性を附与する根拠が見出される。

以上のように、自然・社会は一定不変である。悠久の太古から未来永劫に至るまで変ることはない。しかも更に深く自然・社会を観察する時々その様相を一変している。瞬時と雖も元の様相、性質にとどまることはない。

かくて、自然、社会は、一面では確固として一定不変であるが、他面では極めて変化的であることが分る。これを変化の面に即していえば、その変化は内的連環があるということになる。鴨長明の方丈記は、この自然・社会の二面性を次の言葉で極めて、うまく表現している。いわく「行川のながれは絶ずしてしかも本の水にあらず」。

このことはどういうことを表わすかという点、それは或る一面では自然・社会は発展するという点に他ならないということを表現する。自然科学者は自然にのみ焦点を集中して、自然の発展という立場から自然史を論じ、歴史学者は社会にのみ焦点を合わせて社会発展の立場から、社会史や世界史を論ずるけれども、自然・社会を一体的に考へ両者を通ずる発展の立場から、歴史が考えられないかというのが、私の考えなのである。

かくて、私は文明批評家 H・G・ウェルズ (Herbert George Wells, 1866-1946) の「世界史大系」(The Outline of History, 2 vols., 1920) や「世界史概観」(A Short History of The World, revised 1956) を極めて興味深く眺める。例えば彼の「世界史概観」を見ると、地球の生成、生物の発生、発展、人類の生誕及び一九四〇年代に至るまでの人類の発展を、自然及び社会を一体的に取扱って一つの進化・発展の歴史として扱っているのである。

変化と発展または進化との関係についていえば、一般的に変化 (variation, Änderung) という場合、その内容は多樣的である。単なる運動 (wovement, Bewegung) も一つの変化である。運動は位置の移動として理解される。然し普通変化という時は位置のみならず、広く事物そのものが変わることを意味している。

事物の変化には二通りがある。量的な変化と質的な変化とこれである。前者は量の増減となって現われ、後者は質の下向または上向となって現われる。量の減少または質の下向はマイナスの発展または衰退、もしくは退化 (de-volution, Degeneration) と称せられる。ベルンハイムが発展を定義して「事実即して証明され得る作用の諸連関の義」と解し (S. 53)、もしくは「諸現象が連続し、しかも種々異なる変化」と主張して、敢て高度の内容・性質に変化する意味を附加しなかったのは、発展の中にマイナスの発展、即ち衰退をも包含させる意図であった。(vgl. S. 53)

マイナスの発展または衰退、もしくは退化に対し量の増加または質の上向はプラスの発展または単に発展 (deve-

lopment, Entwicklung) と名付けられる。これは広義の発展であり、狭義では質の上向への変化のみを指す。発展は更に自然界に於ける進化 (evolution, Evolution) と人間界に於ける進歩 (progress, Fortschritt) とに区別される場合もある。

更に発展概念について、もう一つ注意したいことがある。それは良化 (growing better, Verbesserung) という価値評価を含むものではないということである。社会が発展することは、価値あることであり、人間の幸福に繋がる、人は思い勝ちである。そして多くの場合はそうであろう。然し、ここでいう発展は価値中立的な意味のものである。量の増加、もしくは低質から高質への変化、従って単に複雑化することにし過ぎず、人間の福祉といった価値判断とは別箇のものである。つまりそれは価値の通増 (Wertsteigerung) を認めることは異なるのである。リッカートは自然に発展 (Entwicklung) とか進歩 (Fortschritt) を認めるのは、諸文化価値が自然事象の上に移されたからであって、自然科学的に考察すれば、諸有機体の発展は進歩でもなければ退歩 (Rückschritt) でもなく、全く没価値的な変化系列 (wertindifferente Veränderungsreihe) であると称しているが (Rickert. a. a. O., SS. 104-105)、私は社会現象に於ける発展をも価値中立的に解釈するのである。それは戦争技術の発展一つをとってみても判然とする。また経済の発展にしても、長期的観点に立って公害の発生や資源の枯渇等を思い合せると、担板漢の愚を犯さぬ限り、その利害得失は何とも判断に苦しむ。

だから、私は、その点では進歩 (Fortschritt) と発展とを区別する一群の歴史家の説には必ずしも賛成しない。ベルンハイムは全発展の統一目的及び一定の目標、即ち一定方向への進歩という言葉を使っている (Bernheim, a. a. O., S. 55)、和歌森博士は祖父と父と子との関係を引合いに出して進歩と発展とを次のように区別する。いわく、「この三者の間には、ある点について進歩も認められようが、その関係は決して単なる進歩ということだけで説明しつく

せるものではない」。(和歌森太郎、「歴史」、有斐閣、六七頁) 然らば進歩とは何かというと、「進歩ということは後のものが前のものにくらべて質的にも量的にも価値が増大しているということ、前のものと後のものが連続している。」ということを用意している。」と定義づけ、以て「この三者の関係は、むしろ哲学用語をつかえば、連続しながら非連続であり、非連続でありながら、しかも連続しているという関係である。そして歴史上における時代と時代との関係はまさにこうしたものである。したがって連続の面だけに着目し、価値の直線的な増大だけを意味する進歩という言葉だけでは、歴史の動きとその変化を十分に説明することはとうていできない。歴史における変化はもちろん進歩をもふくんでいいるが、それだけにつきるものではない。連続にして非連続、非連続にして連続する変化である。そして進歩をもその一面としてふくむ、こうした変化を、われわれは発展と名づけるのである。」、「歴史における変化は、単なる変化でも単なる進歩でもなく、それらをも内にふくむところの発展である。」と主張される。(同上六七頁)

かくて和歌森博士の進歩と発展との対比は、次の二点に求められる。第一に進歩は直線的な価値の増大を意味する。ところが歴史に於ける発展は進歩をも内に含む変化である。第二に、進歩は連続性の原理にのみ従う。ところが発展は非連続の連続、連続の非連続の原理に従う。

もし叙上のように、発展は進歩をも含み、而して進歩は価値増大を意味するとなると、「文化というわれわれの概念をもはや拡大して文化の前段階と衰退期並に文化を促進または阻止する諸事象をも一緒に考察の中に入れる必要がある」とするリッカートの主張は何とこれを受け取めたらよいであろうか。(Richert, a. a. O., S. 22) しかも発展の中味をこのように広く解釈する点ではベルンハイムやヴェーバーも同説するところである。ベルンハイムはいう、「発展の中味は広義のものであって、作用、発展に對し對立し、阻止する諸要素をも含む。一時的、部分的に、また

は一般的に作用するに至らなかった諸要素も含まれる。」(Bernheim, a. a. O., S. 53) ヴェーバーもいう、「人間がある具体的目的に対してみずからを仇敵として対立させ、"自然への復帰"を渴望する場合でも、それは人間にとって文化なのである。」だからヴェーバーは売春婦の制度をも文化の中に加える。(Max Weber, ≪Objektivität≫ sozialwissenschaftlicher und sozial politischer Erkenntnis, in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, Dritte, erweiterte und verbesserte Auflage, herausgegeben von Johannes Wackelmann, Tübingen 1968, SS. 58-59)

発展は同一物についてのみ生起する。発展は一つの比較概念であるから、これは当然のことである。既述の通り、自然・社会は全一体としてはどこまでも不変であるから、この点で発展の一つの要件が満足されるわけである。

次に自然・社会には質量、エネルギー恒存の原則 (law of the constancy of mass-energy, Gesetz von Erhaltung der Masse-Energy) が貫徹するから、全体としての自然・社会には量的発展ということはあり得ない。存在するのは質的发展のみである。

ベルグソン (Henri Bergson, 1859-1941) は物質現象は本来静止的なものであって、動的本質を備えたものではない。これに反し精神現象は流転そのもの、過程そのものであるとして、物質現象と精神現象とを区別した。だが、物質・自然に果して成長とか発展とか無いものであろうか。もし、自然に成長し、発展する契機が無いとすれば、どうして無生物から生物が生じたのであろうか。全一体として自然・社会を考える場合、生物が最初から生物として存在したと仮定しない限り、自然・社会それ自身に生物を発生させる内在的契機があると仮定する以外に方法はない。aの音を聞き、aの音に関する意識が失われない間に、更にbの音を聞く。そうすると、aとbとの両音の間には断絶 (severance) はなく、断続 (intermittence) あるのみである。この状態を流続 (duration) と称する人があるが、私はむしろ断続と解する。この場合、単にそれぞれ別箇に、a、bの音を聞いた場合の状態に比べると、単なるaプラ

subという状態以上に状態が複雑化しているのであって、これをわれわれは一般に止揚する (aufheben) と称する。止揚は揚棄とも称され、古いものが消滅して新しいものが生ずる場合、古いものが単に消滅するだけでなく、その内容の積極的なものが新しいものの中に採り入れられることを意味する。従って古いものに比べて新しいものはより高資とされ、そこに発展があったとされる。全一体としての自然・社会には極めて緩慢ではあるが、常にこうした発展が観察されるのであって、われわれはこれを自然・社会の発展法則 (Law of development of nature-society, Gesetz von Entwicklung der Natur-Gesellschaft) と称する。エンゲルスは弁証法の立場から弁証法は自然、人間社会及び思惟の一般的な運動及び発展の法則に関する科学に他ならぬ」とか「自然は弁証法の証拠である」という。(F. Engels, Herrn Duhring, SS. 136, 144, 8, 138, 139)

発展というからには必ず時の経過と不可分であるから、自然・社会発展の法則は歴史を貫く法則でもある。ベルンハイムはティセン (Johann Thyssen) がその著「歴史の一回性」 (Die Einmaligkeit der Geschichte 1924) が歴史の素材に関して空間的限定を除外して時間的な系列配置だけを採用したことに對して、総ての事實的な歴史觀察にとつては不可能なものであると徹底的に反対し、歴史はその素材を空間的・時間的发展の事実として把握すると主張しているのであるが (S. 53)、自然・社会発展の法則に付いては時間的觀察のみが、その場を占める。

以上で見た来た自然・社会発展の法則は、社会をも自然の一部と見て社会を自然に還元させ、これを一体的に捉えこれを貫く連続的異質性を単なる連続的異質とのみ理解せず、発展と特徴づけたところに意味がある。発展というからには異質性 (Heterogenität) つまり特殊性 (Besonderheit)、換言すれば個性 (Individualität) の概念が不可避的な要素を構成する。然しその個性がリッカートのいうように単なる漸次的な移行にとどまるならば発展という概念は出て来ない。数多い歴史的事件のことである。それぞれの事件の間には単なる個性的なものの漸次的移行と見られる

場合も確かにある。然しそれでは発展という概念は該当しないのであって、事件の「前個性」に比べ「後個性」が質的に向上し、複雑化している場合にのみそこに発展ありとせられるのである。もちろんこの場合対象化されているものは全一体としての宇宙自然・社会であるから、そこに生起する発展は内在的なものでなければならぬ。弁証法的に言えば前個性を正 (These) とすれば矛盾の原理に従ってそれ自身に反 (Antithese) が生じ、それが一定段階に到達すると総合 (Synthese) され、そこに発展ありとされる。それは螺旋型の上昇道程を辿り、その新なる段階毎に時代区分が附されて、それぞれの時代に特徴的名称が附せられる。もちろん時代が歴史的意義を持ち得るのは、歴史の発展と結びついており、歴史の発展は時代によるのではなく、歴史自体が時代を劃するのであるが、そういうものとして時代を通じて宇宙自然・社会の歴史が語られる。

それは絶対年代だけで説明のつく簡単な時間的運動ではない。それは宇宙から太陽系の発生へ、太陽系から地球の発生へ、地球から生物の発生へ、生物から動物の発生へ、動物から人間・社会の発生へ、人間社会の発生から経済の発生へ、経済の発生から商業の発生へという、全体から部分を派生する相対年代によってのみ説明される分化・発展の時代的運動なのである。

以上のように人間、社会も自然の一部である。従って人間・社会の歴史的発展法則は自然の歴史的発展法則の系であるに過ぎない。然し社会はその特殊性の故に、自然の一部でありながら、自然から取出して、自然に対立させ、以てそれ自体として考えられるのが普通である。然らばその場合、自然と社会とはどう異なるとせられるのであろうか。私は両者の相違点を意味性と変化性の有無に求めたいと思う。人間にとり自然も所与であり、社会も所与である。前者は与えられた所与であり、後者は造り出された所与であるにしても同じく所与である。しかも前者は理論と技術の対象になり得ても歴史の対象にはなり得ない。ところが社会は理論の対象にも、技術の対象にも、歴史の対象にもな

る。既述のように歴史を広く捉えれば、自然史（自然界の歴史 *res gesta*）もその範疇に入る。然し狭義で歴史という時は人間世界に関する歴史（人事界の歴史 *historia rerum gestarum*）のみが歴史と称せられる。ヴィンデルバントもベルンハイムもそう主張している。

例えばヴィンデルバントはいう。「この科学（筆者注歴史科学のこと）に於ける撰択と綜合の原理は常に価値関係である。生起（*geschehen*）が歴史となるのは生起の一回的意義のために、なんらかの方法で直接、間接に価値に係づけられるということを通じてである。」（*Einleitung in die Philosophie von Wilhelm Windelband, Zweite Auflage, Tübingen 1920, SS. 335-366*）「だがこの価値は歴史科学にとっては特に常に人間的な価値である。それ故人間が歴史の中心点に立つ。歴史研究に於ては人間的生起、即ち人間に於ける、人間に即しての生起が取扱われる。物理的事象は、なんらかの方法で人間の価値生活との関係に齎されるというような前提の下でのみ歴史的選択と結合の中にとり入れられる。」（*S. 336*）

ベルンハイムもいう。「歴史（*Geschichte*）という言葉はわがドイツ語では生起しつつあること、生起したこと並に生起の知識及び物語りを意味し、一定の領域には限定されない。われわれは、国家や民族の歴史について話すと同様、植物や動物や地殻の歴史についても話す。然り、近代の自然科学は星の輝く天空、即ち宇宙の歴史を大胆に観察している。然し、われわれが「歴史科学」という特別の意味に於て歴史という言葉を用いるとすると、その語の下に専ら人間界に関係した生起のみを理解する。」（*Einleitung in die Geschichtswissenschaft, von Dr. Ernst Bernheim, Berlin und Leipzig 1926, S. 5*）

このような狭義で、固有の意味の歴史という時は自然史を除外して人間世界の歴史のみに限定される。

一体それはなぜであろうか。それは人間世界は価値即ち意味の世界であり、かつ絶え間なく変化発展するからでは

あるまいか、というのが私の考えである。

意味 (meaning, Sinn) とか価値 (value, Wert) を人間中心に考えて、この世に於ける最高の価値である人格価値からの派生として人間に特有のものと考えると、或いは特殊創造説の立場からは異論もあろうが、自然は人間の存在以前の世界であるから自然界が無意味の世界であり、もしくは意味以前の世界であることは今更いうまでもあるまい。仮りになんらかの意味が自然の中に存在するとしても、自然の認識によってこれを跡づける方法を学び得ると信ずるものは、今日では殆んど跡を絶ったといって過言ではない。もしも自然に関する認識がこの点で何かの役に立つものがあるとすれば、それは却って逆に自然界の意味に関する信仰を除去することではならぬ。(vgl. Max Weber, *Wissenschaft als Beruf*, zweite Auflage, München und Leipzig 1291, S. 20)

ところが、この点社会は全く異なる。それは完全に有意味の世界である。いったい人間は意味ある存在としてはこの現実の世界では唯一の存在であり、絶対的価値の体現者として信仰せられる神や仏すらも、この意味ある人間の信仰的投射に他ならぬ存在であるから、人間の有意味を実現し、実証するものとして人間交互の交渉によって創造せられたが故に存在するこの人間世界が意味性を持つのは至極く当然のことである。この点からすればもともと無意味の存在である自然も意味ある人間に関係づけられる時は意味性を持ち得るけれども、その有意味性はその限りのものであり、そのためには自然界に関する研究は却って意味づけから離れて価値中立的に研究されることを要する。

次に人間・社会の迅速な変化性に関していえば、マイア (Georg von Mayer, 1841-1925) の社会化過程に関する所説が参考になる。

マイアは「自然と人間とを対立させることは全く誤っている。人間は人間として自然に対し無数の線を以って繋っており、それ自身人工の産物でもなく、精神の産物でもなく、自然の産物である。人間は動植物ばかりでなく、無生

物とも同等の地位に立つ」として人間そのものが自然の一部であることを先ず認める（高野岩三郎訳、「社会生活における合法性」、一一二頁）。次に彼はこの前提の上に立って、「人間の社会生活によって喚起せられる特殊の諸現象は自然現象と本質的に異った性格を有している。人間行為の内には、またかかる行為の永続的成果として残る外部制度の内には純然たる自然過程と看做すことの出来ないものが甚だ多い」（同上二頁）、として自然界と人間界との本質的差別性の存在を肯定し、その原因を人間の社会化過程（*Vergesellschaftung*）に求める。いわく「かかる場合には、常に、人間の社会化過程にその起源を有する特殊のものに關係しているということが分る」（同上）。

とはいえ、社会生活の萌芽はあらゆる他の自然物にも認められることであるから、この社会化過程を人間にだけ求めようとするのは一面的見解であろう。そこでこのことを容認しつつ、次にマイアは人間界と自然界との間の社会化過程の本質的相違に触れて次のように主張する。

「しかもなお吾々は人間の社会をかくの如き自然の内に行われている他の社会化過程と比較するとき直ちに一つの本質的相違を感じるのである。人間の社会は不断の進歩発展をすることができ、それは間断なく日日新らしくその内容を豊富にしてゆく歴史を有している。純自然界におけるすべて他の社会化過程には全然歴史がない。それは今日もなお数千年前と同様に行われている。塩溶液の蒸発による結晶にしても、或は一腹の幼虫又は一群の水牛の共同生活にしてもそうである。そして若し此植物或は動物の純自然界においてどこかに歴史的発展の跡が認められる場合には、それは人間の力によるものであるということになる。……ダーヴィニズムが仮説として立てた彼の所謂生物進化の歴史の諸相も、不断に進歩し殆んど休止点のない人間社会の歴史に較べれば、何としても全く問題にならない。」

（同上訳三―四頁）

かくて人間社会は人間が言葉を発明し、哲学的思索を始めるに従い、経済や技術が発展し、特に通商取引が盛行し、

信交通が発達して地球が狭まり、人間相互の間の交渉が深まるに連れ、なかんずく近世絶対主義以後政府權力が拡大されるに連れ、変化は激しく複雑な様相を呈して来るが、自然的条件は社会的条件よりも変化が頗る緩慢で、自然界には概ね単純な過程が繰返されるに過ぎない。そしてそれを歴史に関係づけていえば、自然の無歴史性と社会の歴史性との対比ということになる。

例えば、地球の歴史が誕生以来今日に至るまで始生代、現生代、古生代、中生代、新生代の五時代に区分せられ、この中の新生代だけをとってみても今から七千万年ぐらい前に始まったとせられる程に長期的展望に於てのみ、その歴史が語られるに過ぎないのに反し、直立歩行する意味での最初の人類の発生は僅かに約五〇万年前と推定せられ、その以後(一)先史時代 (prehistoric age) と歴史時代 (historic age) とに區別され、そのうち僅か五五〇〇年以上に遡るに過ぎぬ歴史時代が更に原始・古代・中世・近代・現代と時間的に極めて小刻みに区分せられることを思うと、時代の移り変りの程度が自然と人間・社会とでは如何に隔絶しているかが判る。かくてこの隔絶を極限概念を用いて表現すると、自然は変化しないが、社会は不斷に変化するということになる。なぜそうなるのか。それは自然としての社会の変化性の上に、人間固有の性質、即ち干渉性、特に政治性と社交性に基づく社会の変化性が上乗りさせられるからである。それはちょうど、長期的に見ると、資本主義社会では物価は必然的に騰貴の趨勢にある。それを高度経済成長論者のように軽微なインフレは構わぬと無理な人為的な経済成長政策をとると物上上昇が自然の上昇に加重されて仕末に負えぬ物価騰貴を招くのと同類である。

人間は価値的動物として無限の欲望の泉である。絶えず過去を不満とし、過去からの脱却を求めて前進を図る。それは過去からの単なる逃避という消極的な場合もあろう。更には理想の設定・追求という積極的な場合もあろう。人間の行動には必ず正と負、得と失との両面を含むものであるが、過去からの自由を求めるのに急なためであらうか、

それとも利害得失の究極的計算が不可能なためであろうか、目前の短期的な利益のみに心奪われて人は行動する。それは何も人々総てが、アメリカの実用主義者 (pragmatist) の主張するように、行動することが人生であると、必ずしも悟っているからではあるまい。不安の哲学 (philosophy of anxiety, Philosophie der Angst, philosophie d'angoisse) が示すように、元来人は静止の人生に不安の契機を見出すためであろうか、それとも人はベルグソンの生命哲学が教えたように「生きんがための力」 (strain and stress) を内包する生命の衝動 (life-impetus) にかられるのであろうか、十七世末の静寂主義 (quietism)、更にはそれ以前の老荘哲学や仏教哲学、更には下つての日本の俳諧や能に見られる東洋の神秘主義の特徴である無為とかねはん (涅槃 niffana) とか静とか空寂には到底耐えられぬのである。恰も汽車に乗っていて、汽車がのろいといって、汽車の中を歩き回る愚を演ずるのである。揚向の果て、個人の力では足りぬとあって共同の力、即ち権力を背景とする政府の力を頼む。政府は決して万能力を持つわけではなく、政府を頼れば増税か、インフレか、自由の喪失か、腐敗か、もしくは不公平の発生というマイナス面を必ず不可避とするのであるが、そのことを顧みない。かくていよいよ社会は複雑化する。人間にはみずから求めて社会を複雑化する習性があるようである。その複雑化は自然の複雑化とは到底比すべくもない。しかもその複雑化の度合いは「百年一昔」から「十年一昔」に、「十年一昔」から「五年一昔」に「五年一昔」から「三年一昔」にという具合に年を経るに従つて加速化する。近年に於ける高度経済成長政策とか、日本株式会社とか、猛烈社員とか、多国籍企業とか、多角経営とか、脱本業とかの現象はその表徴である。

われわれはこの現象を自然には歴史はないが、社会には歴史があると特徴づける。

この複雑化の主役を演ずるものは或いは個人であり、或いは団体であり、或いは政府である。更には地震や饑饉のような自然災害が共働する。これらの主役者の演ずる現象はそれぞれ個別的なものである。それを社会的興味に係ら

しめて個性記述的に描けばそこに自然法則定立的な自然科学に対立する意味でのドイツ西南学派流の歴史が出来る。更にこれら諸現象を切り離さず、因果關係的に記述し説明すれば、そこに広義の因果法則的な歴史が出来る。

ところが狭義の因果法則発見的な歴史は異なる。個人、団体、政府に原因する諸現象をひっくるめて、統一的な全体としての社会の動きの現われであると考え、この全体としての社会が時代を経るに従って複雑化を累加して行くその過程を一つの発展の系と見るのである。一つの全体としての社会現象とみれば、社会は時間的な切れ目がない。だから発展がある。ところが個人の行為となると個人の生命には限度があるから如何なる英雄豪傑や偉人の行為と雖も切断がある。それでは発展の要件が満足されない。そこで社会を主役に置いて、社会の発展法則を考える立場からは個人の言行は重点を占めない。もし記述し、説明するとしても極端な場合、「社会の子」(ein Sohn der Gesellschaft)或いは「社会のかいろう」(Marionette der Gesellschaft)にしか過ぎぬという意味合いに於てということになる。

もちろん社会の発展は必然法則のみに依拠するのではない、偶然も発展の契機の一翼を担うとする説があり、更に社会発展の法則からは説明不可能な自然の変異も社会に重大な影響を及ぼす限り記述を省略するわけにはいかぬのであるから、総ての社会的事件を時代的区分に基づく社会発展の法則で説明することは不可能であるけれども、原則として社会発展の法則で歴史を説明する時代に至って始めて、われわれは真正の科学としての歴史を持つに至ったとするのが、科学としての歴史を最も厳格に解する立場である。かくして、この立場では歴史もまた法則科学(最広義)だということになる。

そして以上のことは社会史の一部門である経済史の、そしてまたその一部門である商業史に対しても当然当てはまる。

商業史が最も広い意味の法則科学だとせられる場合、ここに注意すべき点に次のことがある。

商業史は理論商業学と異なり、法則の定立自体をその目的・任務とするものではないということが第一点である。現在の理論商業学が法則定立的科学であることを目指して成功しているかどうかは別として、科学自体の性質として法則科学であるべきが理の当然である。然し商業史は異なる。商業史にあつては個別の商業現象の事実在即する時代的展開が主要眼目を構成し、その時代的展開を後から退行的に回顧すると因果的法則的にまとめられて説明することが出来るというにとどまり、ヘーゲルの歴史哲学のように頭の上から世界精神を予定し、この世界精神が正・反・合の論理を辿って進行的に顕現する過程が人類の歴史に他ならぬとするのでは決してない。

この点で参考になるのはランケ (Leopold von Ranke, 1795-1886) の歴史観である。彼は人生の事柄を知るには個別の認識と抽象の認識、哲学の道と歴史の道との二つあるのみであり、従つてこの二つの認識源泉は厳密に区別されなければならぬとしながらも、歴史の全体を単に事実の老大な集合体とみなし、それを記憶にとどめさえすれば足れりとするのは誤りである。歴史学はその完全な状態に於ては個別の研究並びに考察から出発し、歴史学固有の方法によつて、もろもろの事実の全般的展望、並びに客観的に存在する相互関連の認識にまで高めるべき任務と能力を有すると考える。(Leopold von Ranke, *Über die Epochen der Neueren Geschichte*. 鈴木成高、相原信作訳、ドゥヴェ序言 一一頁)

かくて彼によれば真の歴史家となるためには一つの資格が必要である。第一には個別に對し、ただ個別自身のために興味と悦びとを抱くということである(一一頁) 個別の中に如何に全体が現われているかということは考えないのである。(一二頁)

然しそれだけでは足りない。歴史家はまた普遍に向つてその眼を見開いている必要がある。しかもその普遍は哲学

者のように予め考察されたものではなくて、個別を考察しているうちに、世界の一般的發展が歩いた軌道がおのずから現前してくるといった普遍でなければならぬ。(一二頁)

そこで彼は歴史的個別研究の方法を綜合的哲學的方法に對立させ、肝心の全体の關連に對する不斷の省察を欠いていることを惜しみつつも、前者の模範としてニーブルを賞讃すると共に、後者を代表するものとして細部の代りに體系を置こうとするヘーゲルを批判し、そのやり方はややもすれば恣意的かつ暴力的であり、その結果も事實を精密に検討するとたちまち動揺するとしながらも、普遍的展望を求めようとする要求の上に立つものとして或る眞実性をもつことを認める。(一四—一五頁)

要するにニーブルのとつた方法とヘーゲルの念頭にあつた志向とによつて始めて世界史はその目的を實現出来る。人は深き愛情を抱いて個別研究に向うべきであると同時に、常に歴史の進行をその大局に於て全體的に把握することを忘れるべきではない。しかも人は哲學的方法によつてではなく、純粹に歴史的な方法によつていつそう確實に普遍的展望に到達し得るべきではないであらうかというのが、ランケの大体の歴史的な方法論なのである。(一五頁)

商業史が広義の法則科学だとせられる場合に注意を要する第二点は、最広義な因果法則的な意味に於ける商業史の成立を認める場合、それは因果法則的理論商業学の知識を援用することなくしては、一般に可能ではないということである。商業史に於てわれわれが求めているのは、一つの歴史的な、つまりその商業特性に於て社会的に意義ある特定の商業現象の認識に他ならぬ。商業現象がこの世に生起して以来、地球的な広がりから、時間的流れに従つて生起した商業現象は恐らく無数といつてよいであらう。そしてこの無数ともいふべき商業生起の総ては嚴密にいへば、それぞれに區別せられるべき個性を持っている。然し如何に商業史が個性記述的に商業生起を記述し、説明することゝを任務とするといったところで、無数の商業生起の総てを記述し、説明することは、商業生起の一切の法則に關する

考えられ得る限りの包括的な商業認識を以てしても不可能のことである。それは限度ある人間の理解能力を明らかに超絶する。限りなく充滿している商業現象中の限りある部分現象だけが社会的に有意義であるという前提の上に立つてのみ、個性的な商業現象の認識が論理的に意味を持つ。商業史という個性とは先ず第一にこうした意味の個性をのみ指す。

第二にこうした個性を持った商業生起のみをとってみても、それは複合的存在であつて、自然的成分と社会的成分、その社会的成分をとってみても、宗教的成分、道徳的成分、法的成分等限りなく多くの商業成分以外の成分を有して一体化し、われわれの限度ある認識能力を以てしては、それ自体としては漏れなく知覚し、かつ表現することは不可能である。然らばこうした混沌に秩序を齎す基準は、何かというと、それは如何なる場合にも社会的に興味と意義を持つ商業生起という事情だけに求める以外に方法はない。即ち個性ある現実の商業生起を論理的に加工し、その非本質的部分を排除して清浄化し、よつて残された本質的部分についてのみ、或いは少くともそれに関連づけてのみ史的認識を行なう場合にのみわれわれの考える商業史が成立するのである。事実問題として当該商業現象が個性を持つというのは、恐らく残された本質的部分と排除された非本質的部分とが綜合しての結果であるに相違ない。それにも拘らず、いやそうであればこそ尚更に、商業史がとり出して記述し、説明するのは商業の本質的部分のみに関する、或いは少くともそれに関連を持つ部分に関する商業個性のみに限られるのである。そしてそのことが可能であるのは何が商業であるかという限定に関する理論商業学の知識の援用を当然の前提とするのであつて商業史という商業生起の個性はかくして、この点のみからいえばここで二重規定を受けることとなる。

商業史という科学に関する叙上の簡單化の手續きは商業史に於ける因果關係的把握にも当然に該当する。既述の手續きを経て、対象化された歴史的に個性ある個々の商業現象をその全幅的な現実に於て漏れなく因果的に遡求するこ

とは因果の連関が直・間接空間的にも時間的にも無限の関係にあることを思うと、事実上不可能であるのみでなく、また有意味でもない。因果連関の解明方法には演繹的 (deductive, deduktiv) と帰納的 (inductive, induktiv) との二種類があり、商業史に於ける因果的説明はヘーゲル流のそれではなく、ランケ流のそれに依拠すべきこと既述の通りであるが、そうした帰納的な因果連関の遡求は本質的な原因だけを選り出して、これのみに限定するという簡単化の方法を採用しないわけにはいかぬのである。或る商業現象の個性が問題とされている時には、因果問題とは理論商業学に於けるような商業法則の問題ではなくて、具体的な因果連関の問題なのであり、如何なる公式にその商業現象を類別として帰属せしむべきかの問題ではなくて、如何なる個性的様相にこの商業現象をその結果たるものとして帰属させるべきかの問題なのである。

もちろん商業史も一般商学に属し、こうした一般商学のような文科科学の領域では、一般的なものの認識、抽象的類概念の構成、規則性の認識並びに法則的連関の定式化の試みがなんらの科学的資格を持たない、などという積りは私には決してない。いやそれどころか、むしろ反対に、商業史家の因果認識は具体的な商業結果の具体的な原因への帰属だとすれば、何か或る個性的な商業結果を妥当な仕方で帰属させることは、法則 (定立) 的な知識——因果連関の規則性の知識を利用しないでは一般に不可能である。そうした意味で歴史的な商業個体の因果的説明が問題たる場合はいつでも、因果法則の知識の援用はいつでもその場を占める。それは研究の目的としてではなくて、単に手段として必要とされるとしてもそうである。(vgl. Max Weber, Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher u. sozialpolitischer Erkenntnis, in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 3. Auflage, Tübingen 1968, SS. 178-179) かくて個性化的手続に従う商業史と一般化的手続に従う理論商業学との連関はこの点にも見出されるというべきである。

(昭・四九・九・三〇・稿)